

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25282222

研究課題名(和文) 激変するアジア地域の子どもの身体・文化・生活の相互変容に関する国際比較研究

研究課題名(英文) An International Comparative Study on the Mutual Change of Children's Body, Culture and Lifestyle in Asian Countries in the Midst of Upheaval

研究代表者

佐川 哲也 (Sagawa, Tetsuya)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：70240992

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、激変するアジア諸国における子どもの実態を総合的に把握し、学校教育に有用な資料を提供することであった。タイ、ミャンマー、ネパール及び日本の小学5年生、中学2年生が調査対象として選定され、身体・生活・文化の視点から構成された「子ども生活基本調査」を現地語で作成し、現地共同研究者の協力を得て実施した。その結果、14,236人からの回答を得た。収集されたデータは集計され、4冊の各国版、1冊の統合版の統計報告書として発行し、共同研究機関において公開された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is comprehensively to clarify children's situation in Asian countries in the midst of upheaval and provides useful materials for school education. We selected students in the 5th and 8th grade in Thailand, Myanmar, Nepal and Japan, and made "questionnaire on lifestyle, health and values in Asian children" from three viewpoints of body, culture and values. Collaborative researchers translated in each national language and conducted the survey. Totally 14,236 students answered. We compiled the results of analysis into five statistical data books, which are four country-specific editions and one consolidated edition. Each collaborative organization has disclosed these books.

研究分野：子ども学(子ども環境学)

キーワード：子ども 発育発達 タイ ネパール ミャンマー 日本 国際比較研究

1. 研究開始当初の背景

ネパールでは王政が倒れ、ミャンマーでは大統領制へと移行した。一方、タイではクーデターによって軍事政権が誕生するなど、アジアでは政治体制が変化し、経済の状況も大きく変化している。

社会が急激に変化する国では、子どもの生活にも大きな影響を及ぼす。こうした時代の子ども生活の変化を把握することは、学術的に意義深く、同時に子どもの健康や教育を進めるための重要な資料の提出が期待される。

筆者らは、1983年よりタイ国を中心として、子ども調査を継続して実施してきており、発育発達、遊びと労働、ライフスタイル調査等の蓄積があった。これらの蓄積を活かして、アジア各国において持続的に実施することができる「子ども生活基本調査」が必要であると強く感じて来た。また、蓄積してきた統計データは、過去と現在を比較可能な資料として活用できる状況であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、社会経済状況が急激に変容するアジア地域の子どもの身体変化、文化変化、生活変化と三者の相互作用を比較研究することであった。子どもの発育発達の保障は、国家にとって最重要課題である。しかし、アジアの発展途上国においては、政治的不安定と経済優先の社会発展計画の下で、十分な子ども生活基盤研究がなされていないことから、現地研究者と共同して持続的に子どもデータを収集することに繋がる「子ども生活基本調査」を提案し、当該国の教育政策に有用な統計資料を作成することとした。

3. 研究の方法

「子ども生活基本調査」は、身体・文化・生活の三変化から構成した。身体変化は遊び・労働調査及び発育調査から把握した。文化変化は、子どもの価値観と行動規範から把握した。生活変化は、生活時間、健康生活習慣と自覚症状、学習習慣を把握するライフスタイル調査から把握した。これらを61項目の質問紙調査として作成し、同一の内容で現地語に翻訳した。

調査対象国として、タイ、ミャンマー、ネパールを選定した。また比較対象国として日本でも同様の調査を実施することにした。タイでは、国立体育大学のうち、東北部のシーサケット、ウドンターニー、マハサラカム、チャイヤブームの4キャンパスにチェンマイキャンパスを加えた5キャンパスを共同研究組織として選定した。ネパールではトリブバン大学とポカラ大学を共同研究組織として選定した。ミャンマーでは、元金沢大学留学生タンニン氏(当時は教育省勤務)の協力を得て研究ネットワークを構築した。

調査の実施に当たっては、研究組織と共同研究のためのMOUを作成し、現地研究者が調査を実施すると共に、データ入力を担当した。

入力されたデータは日本において基礎集計を行い、統計資料集を作成した。収集されたデータと統計資料は、MOUに基づいてすべての共同研究者の共有資料として相互に活用することとした。

一地域の調査対象者は小学5年生と中学2年生とし、それぞれ男子200人、女子200人の合計800人を基本調査単位とした。

本研究の調査内容と調査手続きは、金沢大学人間社会研究域人間科学系におけるヒトを対象とする研究審査の手続きを経て実施した。調査協力機関からの要望がある場合は、当該箇所を削除する、または調査対象としない等の措置を講じた。

4. 研究成果

(1) 調査規模と標本数

タイでは、シーサケット県の都市部と農村部、ウドンターニー県の都市部と農村部、マハサラカム県の都市部、チャイヤブーム県の都市部及びチェンマイ県の都市部と郡部を対象地域として、2013年9月の予備調査を経て同12月から翌年1月に調査した。ネパールでは、カトマンズ地域の高原部、平原部及び山間部、ポカラ地域の高原部と平原部を対象地域として、2014年の12月から翌年2月に調査を実施した。ミャンマーでは、ヤンゴン市、モン州及びカヤー州を調査対象地域として選定し、2014年9月から11月に調査を実施した。日本では、金沢市、神戸市、多治見市を調査地域として、2015年12月から翌年2月に調査を実施した。

4か国における共同調査の結果、合計14,236人の児童生徒からデータを収集できた。

表1 得られた標本の数

調査国	全体	小5	中2
タイ	6,374	3,321	3,053
ミャンマー	2,719	1,288	1,431
ネパール	3,006	1,491	1,515
日本	2,317	1,305	832
合計	14,236	7,405	6,831

(2) 統計資料集の作成

収集された調査票は、共同研究機関においてデータ入力され、日本で集約された後、対象国ごとに名古屋学院大学の中野准教授によってデータクリーニングされ、SPSSデータとして処理された後に、共同研究機関に共有データとして再配信された。金沢大学において集計した資料を「アジアの子どものライフスタイルと健康、価値に関する統計報告書(英語)」として各国別にPDFデータとして作成された。4か国の調査が終了した後、4か国のデータを1冊に統合した4か国版を作成した。これらのデータは印刷され、PDFデータと共に各共同研究組織に送付した。各研究組織に対して、これらをライブラリ等に配架して、広く公開するよう要請した。その

一部は、金沢大学のデポジトリに公開した。

(3)分析結果の概要

得られた統計資料を基に様々な分析を実施した。その一部は次のようである。

2013年時点のタイの子どもの外遊びは、都市部と農村部で実施率に差が認められた。これは、家庭内労働の実施状況やPCの所有率、テレビ視聴時間差などの都市化の水準の違いによると推察された。しかし、遊び内容にはほとんど差がない状況が明らかになった。小学5年生の遊び内容は、スポーツが最も盛んであり、次いで自転車及び電腦ゲームであった。伝統遊びは僅かに鬼ごっこしかくれんぼが確認できたが、それ以外は確認できなかった。伝統遊びの消失化が一層進んだ。子どもの家庭内労働を4か国で比較した。いずれの国でも、女子の実施数が男子を上回っていた。ネパールの中2女子では、平均で4.0種類の家事を担当しており、4か国中最も高かった。日本とミャンマーでは、2.1種類と低かった。ネパールやタイでは、掃除、洗濯、食事の用意で高い値を示した。日本では食事の用意・片付けで高い値を示した。食事の用意について、日本では配膳が主であるのに対して、ネパールでは料理自体も担当しており、労働の質が国によって異なっていることが明らかとなった。

学校がとても楽しい者の割合は、ネパールが最も高く、次いでタイ、日本、ミャンマーであった。ネパールの子どもたちは貧素な住環境と労働から解放され、学校生活を楽しんでいると推察される一方、日本では学校に行くことが当たり前となっており、学校への不適應も発生している可能性が示唆された。また、いずれの国においても、学校の楽しさと気分調節不全傾向とに顕著な有意差が認められ、学校が楽しい子どもは、気分調整が良好である傾向が確認された。

子どもの睡眠状況を比較すると、日本が顕著に夜型化していることが明らかとなった。これと関係して、日本の子どもは起床時に眠い子どもが4か国中最も多かった。また、日本の子どもは気分調整不全傾向が高めであり、睡眠の夜型化との関係が示唆された。テレビ視聴時間では、タイと日本が長かった。ミャンマーとネパールは短く、家庭学習時間が長い傾向であった。生活習慣と気分調節不全傾向に関連があると推察された。

子どもの価値意識は国によって異なる傾向が示された。日本では、約束、協力・人助け、目標達成で高い値を示した。タイでは、親、成績、目標達成で高い値を示したが、意見やリーダーシップでは低い値を示した。ネパールでは、成績、リーダーシップで高い値を示し、学校が楽

しいこととの関連が示唆された。ミャンマーでは、親、約束、目標、性役割で高い値を示したが、意見、リーダーシップ、競争で低い値を示した。これら低値を示した項目は、過去の政治体制との関連が示唆された。

子どもの不定愁訴と生活習慣との関連を検討した結果、いくつかの項目で関連が示唆された。例えば、タイの子どもはジャンクフード(スナック菓子)の摂取が高く、疲労感や腹痛との関連が疑われた。ジャンクフードの摂取率が低かったミャンマーやネパールでは関連が弱かった。タイの子どもの起立性調節障害(OD)を分析した結果、中学生と女子に疑陽性児が多い傾向が確認された。また、テレビ視聴時間やビデオゲーム実施時間、就寝時刻の生活習慣が影響していることが示唆された。健康生活習慣の改善によってODの発生率を減少させる可能性があることも示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

T. Nakano, W. Nirantranon, T. Sagawa, S. Kokudo, Relationship between Orthostatic Dysregulation (OD) and Lifestyle of Udonthani Children and the Influence of OD on School Life. Journal of the Association of Private Higher Education Institutions of Thailand, 査読有, 21(2), 2015, 49-58, https://drive.google.com/file/d/0B_vL6x-CIS_PRNpXbFFVcko5bjQ/view

[学会発表](計8件)

佐川哲也, 國土将平, 中野貴博, ミャンマー、ネパール、タイ、日本の児童生徒の気分調節不全傾向について アジア子ども基本調査からの報告 その3, 日本発育発達学会第15回大会, 2017.3.17, 岐阜大学(岐阜)

國土将平, 佐川哲也, 中野貴博, アジア諸国における子どもの健康的な生活習慣の実態, 日本学校保健学会第63回学術大会, 2016.11.20, 筑波大学(つくば)

中野貴博, 佐川哲也, 國土将平, アジア諸国における子どもの生活時間, 学校生活状況および不定愁訴発現の実態と関係性, 日本学校保健学会第63回学術大会, 2016.11.20, 筑波大学(つくば)

佐川哲也, 遊び・勉強・労働から理解するアジアの子どもの生活, 神戸大学学術 WEEKS 2016, 2016.11.12, 神戸大学(神戸)
中野貴博, アジアの子どもの生活習慣と健康との相互作用, 神戸大学学術 WEEKS 2016, 2016.11.12, 神戸大学(神戸)

中野貴博, 佐川哲也, 國土将平, 小磯透,
ネパールの児童における投能力の実態と
学校形態による違い, 東海体育学会第 64
回大会, 2016.10.30, 名古屋学院大学(名
古屋)

佐川哲也, 國土将平, 中野貴博, ミャン
マー, ネパール, タイにおける子どもの
家庭内労働-アジア子ども基本調査から
の報告 その2-, 日本発育発達学会第
14 回大会, 2016.3.6, 神戸大学(神戸)
佐川哲也, 國土将平, 中野貴博, タイ国
における子ども遊びの地域差 アジア子
ども生活基本調査からの報告 その1,
日本発育発達学会第 13 回大会,
2015.3.15, 国土館大学(世田谷)

〔その他〕(計6件)

成果報告書

T.Sagawa, A Report of Grant-in-Aid for
Scientific Research (b), An
International Comparative Study on the
Mutual Change of Children's Body,
Culture and Lifestyle in Asian
Countries in the Midst of Upheaval,
Kanazawa University, 2017,67 ページ

統計報告書

Tetsuya Sagawa, Takahiro Nakano and
Shohei Kokudo, Statistical Data Book
on Lifestyle, Health and Values of
Asian Children -Thailand, Nepal,
Myanmar and Japan-, Kanazawa
University, 2016, 207 ページ,
<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/2297/46888/1/ED-PR-SAGAWA-T-211.pdf>

佐川哲也, アジア子ども調査報告書-金沢
調査 2015-, 金沢大学, 2016, 183 ページ,
<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/2297/46891/1/ED-PR-SAGAWA-T-187.pdf>

Tetsuya Sagawa, Takahiro Nakano and
Shohei Kokudo, Statistical Data Book
on Lifestyle, Health and Values of
Asian Children - Myanmar Survey 2014-,
Kanazawa University, 2016, 109 ページ

Tetsuya Sagawa, Bhimsen Devkota,
Takahiro Nakano and Shohei Kokudo,
Statistical Data Book on Lifestyle,
Health and Values of Asian Children -
Nepal Survey 2014-, Kanazawa
University, 2015, 169 ページ

Tetsuya Sagawa, Takahiro Nakano and
Shohei Kokudo, Statistical Data Book
on Lifestyle, Health and Values of
Asian Children - Thailand Survey 2013-
provisional edition, Kanazawa
University, 2015, 168 ページ

佐川 哲也 (SAGAWA, Tetsuya)
金沢大学・人間科学系・教授
研究者番号: 70240992

(2)研究分担者

國土 将平 (KOKUDO, Shohei)
神戸大学・人間発達環境学研究科・教授
研究者番号: 10241803

中野 貴博 (NAKANO, Takahiro)
名古屋学院大学・スポーツ健康学部・准教
授
研究者番号: 50422209

6. 研究組織

(1)研究代表者